受難節第 4 主日礼拝説教要旨(3 月 15 日)　　『栄光を受ける時』

ヨハネによる福音書 12:20-26　早川 真牧師

今朝の個所にある栄光という言葉には輝きという意味もあります。聖書は本当の輝きは人がとても輝かしいとは思えないものの中にあると告げています。それは十字架の中です。十字架は恥と嘲りの場所であり、最も輝きとはかけ離れた場所であるように思われます。それがなぜ輝くのでしょうか。

それは、そこに神の完全な愛があるからです。その神の愛は、最愛の独り子を私たちのために一粒の麦として地上に遣わし、十字架の上で死に、復活することを通して御子を信じる全ての者に永遠の命を約束してくださった愛です。今朝の聖書の個所は、ここにこそこの不完全な世の中において完全な輝きがあると私たちに告げています。

父なる神の御心に従う時、それは自分の思いに死ぬ時です。その道は時に自分の力では到底歩むことが出来ないと思うような道であることでしょう。そして事実その道を行くなら死を迎えます。しかしそれは自分の力で物事を成し遂げようとする、自我と野心の死です。神の御心に従う時、必ず自分の力の限界を迎えます。しかしそこに神が働かれ、神の栄光が現れます。その意味で主の御心の道は自分の力不足を感じる道だと言えます。それは一見死に向かっているようで実は命に向かう道です。人の破滅を通して神はその中にご自身の栄光を現わされるからです。

栄光を受ける時、それは神の御心に従う時です。そしてその栄光とは主の栄光であり、私たちの栄光ではありません。神はご自分に従う者を決して見捨てることなく大切にし、たとえつまずいても倒れても必ず立ち上がらせてくださいます。この神の完全な愛の中に飛び込み、主イエスの栄光に共に与らせて頂きたいと願います。